

福岡県における占領期の保育(1)

——「九州保育新聞」の分析を中心に——

清原みさ子・豊田和子・原 友美
寺部直子・榊原菜々枝

はじめに

本論文は、日本学術振興会の科学研究費「福岡県における占領期の保育——保育先進県における戦後保育構築に関する実証的研究」(平成23～25年度、基盤研究(C)23531075)の助成を受けて行っている研究の一環である。昭和20年代前半に、戦後の混乱の中で立ち上がり、保育を進めていった実態を明らかにするものであり、今回は、「九州保育新聞」を取り上げ、その内容分析を中心にまとめる。

1. 福岡県の昭和20年代の保育概況と「九州保育新聞」

福岡県は、戦前から企業の託児所や農繁期託児所が普及していた県の一つであり、全国的に見て保育所の多い県であるが、幼稚園の普及状況は低調であった。『福岡県教育要覧(昭和28年版)』に、「保育所の数においては本県は全国で2、3位を競う地位にありながら幼稚園の数に至つては、公立が全国で28位、私立が10位という状況である。更に言えば、本県と小学校数がほぼ匹敵する愛知県や兵庫県を例にとると、前者は公立小学校533校に対して公立幼稚園は122、後者は公立小645に対し224であるのに福岡県は公立小604に対して公立幼稚園は僅かに7という現状¹⁾が指摘されていることから、幼稚園の少なさが浮かび上がる。

戦後の昭和20年代に、県内に何ヵ所の保育所、幼稚園があったのかに関しては、統計資料の不完全さもあり、資料によりその数値が異なっている。ここでは、保育所に関しては福岡県保育所連盟が創立十周年記念に出した『福岡県の保育事業の概況』、幼稚園に関しては『福岡県統計年鑑』からの数を、表1に掲げ

た²⁾。幼稚園に比して、保育所がいかに多かったかがわかる。保育所数を他府県との比較でみると、昭和22年3月末には山口県に次いで、昭和24年1月1日時点では愛知県に次いで、全国で二番目に多かった。

表1 幼稚園・保育所数

幼稚園		保育所	
昭和23年	25	昭和23年末	114
昭和24年	31	昭和24年末	177
昭和25年	37	昭和25年末	219
昭和26年	43	昭和26年末	284
昭和27年	52	昭和27年末	346
昭和28年	71	昭和28年末	404
昭和29年	120 (1)	昭和29年末	419

(1)は分園

では、幼稚園と保育所は、県内のどの地域に開設されていたのであろうか。幼稚園と保育所の地域別の統計資料が載っている昭和23年と28年の『福岡県統計年鑑』から作成したのが、表2と表3である³⁾。昭和20年代の前半は、公立幼稚園は明治23(1890)年に設立された小倉幼稚園のみである。最初の3年間での増加は、都市部が中心であり、特に現・北九州市での増加が著しかった。市部と郡部の比率は、昭和23年には3:1で市部の方が多い。昭和26年には6:1となりさらに市部の方が多くなっている。その後の28年までの2年間では、市部で公立幼稚園が増え、郡部でこれまで幼稚園のなかったところに設立されている⁴⁾。

保育所の方は、表3から分かるように、昭和23年12月末には市部68に対して郡部73と郡部の方が多い。昭和28年には、市部と郡部で比較してみると、公立

表2 地域別幼稚園数

	昭和23年	昭和28年
福岡市	6	13
若松市	1	2
八幡市		8
戸畑市	2	3
直方市		3
飯塚市		1
久留米市	4	6
大牟田市	1	6
小倉市	1	10
門司市		7
田川市	4	1
柳川市	—	
粕屋郡		
宗像郡		1
遠賀郡		1
鞍手郡		
嘉穂郡		1
朝倉郡		
筑紫郡	1	3
早良郡		
糸島郡	2	2
浮羽郡	3	1
三井郡		
三潁郡		1
八女郡		1
山門郡		
三池郡		
田川郡		
京都郡		
築上郡		

表3 地域別保育所数

昭和23年	昭和28年 (公立) (私立)	
13	5	24
5	6	2
6	7	7
3	2	3
3		3
6	2	9
5	1	7
9	1	22
9	2	11
4	2	8
5		11
—		5
1	3	13
1		4
11		16
3	7	6
19	2	25
2	8	7
2	1	15
1	1	4
2	1	7
3	7	7
6	9	11
1	5	5
3	3	13
1		14
4	7	18
4	2	5
9	10	12

は3:7、私立は公立ほどではないが6割以上が郡部で開設されていて、幼稚園と比べると郡部に多いことがわかる。特に、嘉穂郡、田川郡をはじめとして、炭鉱地帯には保育所が多かった。市部では、福岡市以外では、大牟田市や小倉市のような工・鉱業都市が多かった。

幼稚園が少なかった郡部では、保育所としての役割と同時に、就学前教育という幼稚園の機能を果たすことも期待されていた。それは、福岡県が昭和26年に指定したモデル保育所の一つであった浮羽郡の御幸保育園に残されていた資料から明らかであったし、同様にモデル保育所であった築上郡の友枝保育所が退職した小学校長によって小学校の敷地内に開設されたこと

からもうかがえる。昭和20年代後半以降、保育所から幼稚園へ変更した施設があったことも、両方の機能を求められていたことの表れと思われる。

次に「九州保育新聞」に関してであるが、この新聞は「学業院新聞」として昭和21年4月29日に第1号が出されていて、昭和23年7月25日に出された第26号から「九州保育新聞」と紙名が変更されている（以下、「九州保育新聞」とする）。国立国会図書館にあるプランゲ文庫には、第1号から昭和24年9月30日の第37号までが保管されている。その号数、発行年月日は、資料1として文末にあげてある。新聞の編集は、九州保育研究所となっているが、その中心は岡田栄資であった。岡田は、昭和21年に発足した福岡県保育連盟で、副会長になっている。都府樓保育所の所長でもあり、この新聞には、同保育所の園児募集等の記事も時々掲載されている。また、岡田がかかわっていた宮村女子商業に関する記事も掲載され、岡田が中心であったと推察できる。

この新聞の発行形態や発行部数は不明であるが、昭和26年の県のモデル保育所の一つであった木屋瀬保育園に、第30号と第34号が残されていたことから、少なくとも県保育連盟に加入し、活動していたようなところでは、購読していたと思われる。

この「九州保育新聞」に掲載された記事を中心に、適宜他の資料で補足しながら、「保育関係組織の活動」「保育大会」「各地区の研究會・講習會」「保育の養成」に分けて分析し、その特徴を明らかにする。さらに、福岡県保育連盟が出していた『育てつつ』についての分析も行う。

なお、この新聞の第38号以下は、現時点で確認できていない。岡田が所長をしていた都府樓保育所、関わった宮村女子商業は既がない。昭和31年に岡田が園長となって開園した都府樓少子部幼稚園は現存するが、資料に関してはないとのことである。

(清原みさ子)

2. 保育関係組織の活動について

(1) 福岡県保育協会設立

昭和21年の第4号には、「飛躍する保育事業 福岡県に 保育協会設立されん 一般の熱望に応へ当局援助に起つ」との見出しがあり、保育協議会開催を機に設立運動が盛り上がった。そして、第5号に、「福岡県保育協会設立準備委員会は八月九日午前十時より太田報徳会」で各地区代表が「会則案の審議等」、第8

号には「福岡県保育協会結成」の記事がある。その内容は、両筑保育協会が設立され5地区⁵⁾になったので、11月8日午前11時より「久留米市大谷幼稚園に於いて各地区協会の連合会たる『福岡県保育協会』の発会式を挙行」とあり、第1回総会は12月3日となっている。

(2) 福岡県保育連盟 第1回総会の様子

第9号には、「福岡県保育連盟 第一回総会」のことが取り上げられている。その記事内容は、12月3日(火)10時から「福岡市鳥飼、福岡保育専攻学校講堂」で理事会と並行して二班に分かれ「早緑幼稚園と早緑国児院とを見学、午後一時から総会」で、挨拶や記念講演等があり、「会長 福永津義 副会長 大野柔忍 岡田栄資 常任理事 副嶋義雄」で理事は地区ごとに2名ずつ、「事務所は福岡市役所社会課気付福岡市保育協会内」と記載されていて、福永津義が当時その学校長をしていた福岡保育専攻学校が会場で、記念講演も彼女自身が担当し、その附属の施設であった2つの園を公開し、見学を催したことがわかる。

(3) 福岡県保育連盟

「福岡県保育連盟」に関しては、昭和22年から23年にかけて、5件の掲載記事があった。まず第21号の記事には「県保育連盟結成一周年」という見出しがあり、その内容は福岡県保育連盟が昨21年12月3日結成されたが、「こゝに一周年を迎えたので来春一月中旬福岡市に於て記念総会を挙行、優秀保育婦の表彰 県外への視察旅行派遣等を行い、又待望の児童福祉法の通過に伴い研究講演等をも開催することゝなつた」と記されている。続いて、翌年第22号には「県保育連盟第二回総会 三、四月頃計画 内山会長を囲み保育座談会」の見出しで、内容は、「県社会課長の児童福祉法の解説、全日本保育連盟会長の内山氏特別講演等も計画されている」とある。第23号には「福岡県保育連盟事務所移転」という見出しで、事務所が福岡市役所から県の社会事業協会内へ移管されたことが記されている。さらに第24・25号には「県民生部児童課内に」とあり、この経過から、事務所は短期の間に移転を繰り返し、最終的には福岡県の児童課に定着した様子がわかる。また、同号には、県保育連盟総会が「五月二十八日午前十一時から大宰府神社文書館で」とある。そして第26号には、「福岡県保育連盟 新発足 会長 大野柔忍」と記載されている。その後この連盟は、第27号では「筑豊保育連盟」、第37号では「田川地区に保育連盟生る」などによって拡大をみる。

つまり、新聞記事をみると、福岡県には「保育協会」と「保育連盟」の2つの名称の団体が並行して、記載されている。

(4) 団体の特色

「福岡県保育協会」は、上述の第1回総会で会長に福永津義を選出していることから、「協会」の名前で総会を開催し「連盟」と改称したが、昭和23年7月の「連盟新発足、会長 大野柔忍」までは、「協会」組織として運営されていたことが推測される。初代会長の福永津義は、発足当時から第8号「福岡市保育協会会長就任」をし、その後は第26号に「福永津義(福岡地区保育協会会長)」とあり、福岡地区での代表者となる。

また、昭和23年第30号には「福岡県保育協会 臨時理事会」、翌年第35号には「福岡県保育協会総会 理事会も同日開催」とあり、5月31日に総会を開き、当時の会長は、大野柔忍であることが確認された。したがって、「福岡県保育連盟」は「福岡県保育協会」を母体として発足し、しばらくは福岡地区が活動拠点であったが、その後、県レベルの組織として発展していった。同時に、福永津義をリーダーとする「福岡市保育協会」もそれと連動しながら活発な活動を展開していた。

(5) 九州保育連合会

「九州保育連合会」については、第24・25号に、「九州保育連合会生る」の記事がある。そして、第27号によれば、九州保育連合会では、昭和23年8月27日に別府で第1回九州各県代表者会議と理事会が開かれ、各種の協議を行い、第1回九州保育大会の開催が決定される。第28・29号に、「九州保育連合会 事務局を開設 局長に岡田栄資氏」、第30号には、「九州保育連合会 正副会長決定」「福岡県保育協会長大野柔忍氏と、熊本県保育連盟会長高森豊氏」とある。また、同号では、「九州保育連合会事務局では法律顧問として弁護士今福朝次郎氏を嘱託」ともある。そして、翌年第31号、第35号に「九州保育連合会 各県協議会」が開催されたとあった。また、第36号では、「九州保育連合会長大野柔忍氏(福岡会長) 同副会長高森豊氏(熊本会長) 大分県の秋吉、天門正副会長鹿兒島の保育連合会副会長友田静恵氏をはじめ長崎市保育会長荒木嘉弘氏、福岡の藤信子氏、水上覚心氏夫婦」と記されている。

上記のことから、保育関係の全国規模組織としては戦前からの「全日本保育連盟」(昭和11年、西村真琴

が大阪毎日新聞社会事業団内に結成) などにより保育事業の拡充強化が図られてきたが、福岡県においては昭和21年ころから社会事業協会主催の保育協議会設立等の運動が盛り上がってきた。県レベルの組織としては、同年12月3日に「福岡県保育連盟」を結成し第1回総会を福岡市内で開催し、その後、県内各地に支部的組織を広げると同時に、全国組織とも連動しながら活動を活性化していった。

(榎原菜々枝・桜花学園大学)

3. 全国保育大会と九州保育大会

(1) 全国保育大会

第1回全国保育大会は昭和22年11月に東京女子高等師範学校で行われ、第2回大会は第24・25号にあるように、翌年7月27日から31日に奈良女子高等師範学校での開催が決定された。第27号によると、この大会では総会、分科会等があり、戸倉ハルのリズムの指導や、講演として坂元彦太郎「新しい幼児教育」、吉見静江「児童福祉について」、小川正通「幼児教育の進展」、末川博「新教育の動向」が行われた。この大会の参加者は、1600名ほどで、同号によれば、福岡県からの参加者は、福永津義、藤田貞雄、岡田栄資をはじめ、16名であった。また、第3回全国保育大会が「来年は新潟と決定 再来年は九州か」という記事もあった。

第35号には第3回大会は、昭和24年7月27日から30日に新潟大学での開催が決定し、「九州から多数参加を期待」という見出しがあった。同号には、大会は総会、記念講演会の他、分科会として組織経営、保育理論、保育実際に関する部会を行うことが記されている。この大会の記録書⁶⁾をみると、次回の九州大会に備えて、福岡県から大野柔忍、岡田栄資、藤田貞雄、鷲峰敦尚、及び児童課から、合わせて13名が参加している。

第4回全国保育大会は、『第4回全国保育大会要録』⁷⁾によると、昭和25年7月28、29日に福岡市で開かれ、開催の会長は全日本保育連合会々長、倉橋惣三で、副会長の一人であった大野柔忍は大会準備会長を務め「経過報告」を行っている。この大会の分科会では、幼稚園と保育所がそれぞれ制度、組織、経営等について話し合っている。

(2) 九州保育大会

この大会に先立ち、第24・25号にあるように、全九州保育界が提携し、九州保育連合会が生まれてい

る。本稿2(5)で述べたように、第1回理事会で九州保育大会の開催が決定される。次の第28・29号では「全九州保育大会 十一月に開催か 各方面から期待」されていること等が記されている。第27号に第4回全国保育大会は「福岡市等で開かれる見込で九州保育連合会では之が準備委員会を設けることになる」と記されているように、都府樓保育所に開設された事務局内に、第4回全国保育大会の準備委員会が設置され、その結成式が大宰府で行われている。また、第31号では、九州保育連合会が活動を進めるにあたって、全九州の各施設に支援と協力を求めたところ、九州各地から多数の激励の言葉や、事務局活動資金も寄せられていることがわかる。同号には「九州保育大会を今春三月頃開催 着々準備すゝむ」と書かれていた。

さらに「九州保育連合会各県協議会」に関する記事もあった。同協議会は、昭和23年12月18日福岡市外で開催され、福岡県大野柔忍会長、熊本県高森豊副会長、大分県会長代理田北みつ、鹿児島県会長代理友田静恵等が出席、岡田栄資事務局長から経過報告及び原案の説明があった。そして、協議の結果、昭和25年に福岡市で開催される全国保育大会については、九州保育大会で協議すること、「機関雑誌名を『九州保育』」とすること、「九州保育新聞は機関新聞として各県共各園一部以上とするよう協力すること」等が決定された。

第32号には、まず、「九州大会に期待する」という見出しがある。続いて終戦後、九州での保育大会開催は初めてで、九州保育連合会結成後、最初の大会であり、「今回の大会では全九州の保育人が一堂に会して親睦を加えると共に」「提携を緊密に益々団結を強固にして保育事業の進展」のため、互いに研究発表し経験を語り合うことに本大会の意味があると書かれている。同号には「九州保育大会 三月二十七日から鹿児島市で開催 多数参加を希望」とあり、照会や宿泊申し込み等は、九州保育連合会事務局または、早緑幼稚園へととなっていた。そして、次の第33号では、「さあ、行かう鹿児島へ 保育大会、準備全く成る 集う全九州の保育人 参加申込は今すぐに！」という見出しになっている。

第1回九州保育大会は、昭和24年3月27日から30日まで、鹿児島市で開催された。第35号には「第一回九州保育大会 成功裡に終了」という見出しがついていて、この大会には、第1日目は300余名が参集した。「挨拶 九州保育連合会長 大野柔忍」「経過報告 九州保育連合会事務局長 岡田栄資」「特別講演 鹿

児島県立図書館長 久保田彦穂」「記念講演 全日本保育連盟名誉会長 久留島武彦」と記されている。第1日目には各県有志懇談茶話会も行われ、会長の大野柔忍、事務局から原田孝太郎、藤田貞雄、大分県保育会副会長天門成章等80余名が参加した。第2日目から3日間は講習が行われた。その講師と内容は、東京女高師教授の及川ふみの「新保育の実際と製作」や東京女高師附属幼稚園の吉田トミの「リズム指導」であった。また、「第一回九州保育大会を記念して 全日本保育連盟で九州の功労者を表彰」が行われた。功労者は福岡県内各地域から選ばれ、「大里育児園」「愛国保育所」「初音保育園」「黒崎託児所」「三萩野保育園」「甘木保育園」「二葉保育園」「舞鶴幼稚園」「聖徳保育園」「金龍幼稚園」「清高保育園」「犀川保育園」「大名幼稚園」「福岡幼児園」「養巴幼稚園」「崇福保育園」の16園から計18名(園長、所長、保母)が表彰された。この保育表彰状には、長年、幼児保育に研鑽し、戦後特に尽力したことによって、その功績を顕彰するという文言が記されている。

上述のように、全国保育大会にも福岡県から積極的に参加し、この第4回大会が福岡市で開かれたことや、それに先立ち昭和23年に九州保育連合会が生まれ、事務局は福岡県内に置かれたことから、このような大会の開催準備を活発に進め、大会を盛り上げる上で、福岡県が大きな役割を果たしていたといえよう。

(原友美・愛知県立大学非常勤講師)

4. 県内各地区の研究会・講習会

(1) 県連盟等主催の講習会

前述のとおり、昭和21年12月3日の保育連盟理事会・総会開催時に、理事会と並行して二班に分れ早緑幼稚園と早緑国児院を見学した。その際の総会行事として、第9号によれば、「久留米医大の山本三郎先生の『幼児の心理』」と題する講演が行われた。

また、第24・25号によると、全日本保育連盟と福岡県保育連盟共催の保育講習会が昭和23年5月28～30日に大宰府文書館、太宰府小学校で開催され、福岡県内のみならず、九州各県、岡山県からも、合わせて300人以上が参加した。その内容は、久留島武彦「児童生活とお話の意義その取扱い方」、矢野洋三の「人形芝居」、豊田次雄「絵本の与へ方」、竹岡文学博士「太宰府と菅公」、土屋澄「新しい児童舞踊の実際指導」、内山憲尚「新教育法と児童教育の在り方」と紹介されている。

(2) 「九州保育研究所」の設立

①九州保育研究所の設立

昭和23年7月の第26号に、九州保育研究所が設立されたことが報じられている。所長は、県連盟の会長でもある大野柔忍、学監は、副会長で「九州保育新聞」の発行者でもある岡田栄資、その事務局は、「当分福岡県筑紫郡水城村都府樓保育所に置かれる」とされ、「研究所設立をきき、各地方からの既に講演や講習、実地指導等の依頼が到来しているが、研究所としては繰合せて此等の要望に応える」とし、福岡県各地区の講習会・研究会へ講師を派遣するだけでなく、24年には、九州各地での巡回の講習会を行い、月一回の研究例会も企画していた。「講師には新進気鋭の士を網羅される筈である」とし、「既に決定した顔振れ」として、ギニオルの矢野洋三、ピアノの大野洋子、舞踊の藤田貞雄、童話の原田孝太郎(同号で書道の講師としても紹介されている)の名前があげられている。

②講師の横顔

1) 藤田貞雄

昭和2年双葉舞踊研究所開設。小学校教員19年小学校長1年青年学校長2年。昭和5年音楽学校に入り東京高田舞踊研究所にも入所。昭和15年から中国に渡り、青島・濟南方面で活躍していた(第27号)。昭和24年4月には久留米市の護国神社内に南薫幼稚園を開園し、園長となった(第35号)。

2) 大野洋子

保育協会会長の娘。大正10年8月米国で生まれ、幼稚園、グランマースクールに入り、昭和14年千代田高女から目白の女子大学家政科の卒業。ピアノは昭和4年から7年までドイツ人ミセスクラフエンスティン教授に、昭和9年から16年まで坂本ソノ他に師事。研究所講師のかたわら都府樓保育所と善隣保育園の実際指導にあたっている(第27号)。

3) 矢野洋三

福岡県行橋の生まれで、昭和10年8月に済美幼稚園を開園した。昭和15年には上京して日本紙芝居協会の創立に参加。「斯道の大家として知られている」「現在九州童話連盟九州児童協会等の理事として又童心座を主宰し、農山漁村文化連盟講師となつて地方文化の振興につくしている」(第31号)。

4) 原田孝太郎

「元宮内庁の囑託観岱」「双葉書道会長」(第26号)。昭和23年には両筑保育協会の会長に就任しており「日本大学高等師範部に学び在京中は宗教雑誌『大道』の

主筆となり神田で書道塾も開いていたが帰郷後は瀬高保育園を設立経営(第23号)していた。

③九州保育研究所主催の企画

1) 「山の教室」

昭和23年の第28・29号に、保育研究所の主催する行事として10月30日(土)、31日(日)に「休養と慰安の山の教室」を八女郡黒木町の黒木幼稚園で開催するという予告があり、第30号にその報告として「九保のリクリエーション 大成功の“山の教室”」という見出しの記事があった。この参加者は50名を超え、催しに協賛した両筑協会会員をはじめ、戸畑、八幡、田川、遠賀等からの参加者もあった。初日は、黒木幼稚園を自由見学、研究懇談、入浴食事の後、黒木高等学校講堂で高校生たちの演劇を鑑賞。特別来賓として「保育界のエキスパート牛島武夫氏の舞踊」や「研究所講師藤田貞雄氏の『槍さび』」などを披露して好評を得た。翌日は、「日向神の秘峽」をめぐるハイキングを楽しんだ。

2) 「海の教室」

この「海の教室」は、上記の「『山の教室』の成績に鑑み」開催すると、その翌年5月の第35号紙上で予告され、第36号に募集記事が掲載された。日程は一泊二日で、7月22日(金)正午に「玉の井旅館(津屋崎町海岸)に集合三時まで海水浴等自由、三時～五時研究発表(幼児のうたとゆうぎについて藤田貞雄)六時晚餐、九時まで保育人懇談会、十時就寝」で、7月23日(土)は「六時起床、海岸で保育体操、七時朝食、八時～津屋崎公園」へととなっている。22日夕方一応解散、希望者だけ旅館に一泊するというものであった。

(4) 県内各地区での研究会

県内で各地区が主催した研究会等にかかわる記事が掲載されていた。第32号の「九州の保育界(2) 福岡県の巻」では、各地区の支部長、理事等を紹介した後、「なお右の各地支部では毎月一回以上研究会を開催、経営等も従事者も真剣な研究が続けられている。研究会は誰にでも開放されているから何処の会合に出ても自由である」と各地での研究会について紹介している。この研究会は主に支部の例会と同日に行われる場合が多かったようである。(以下、各地区の地区に含まれる市、郡は同上記事による。)

①京築地区(京都・築上郡)

例会と同日に研究会を開催しており、第26号によると昭和23年6月4日には、青蓮保育園で、地区の園長、保母が全員出席し前回の講習会の復習や前述の

「太宰府講習会」の感想発表などを行った。7月の「定例研究会」は、清高幼稚園^(ママ)で、律動遊戯の研究、一日の保育研究と批評会が行われた。9月には、善隣保育園で、九州保育研究所から講師を招聘、藤田講師から秋の運動会用の遊戯の実地指導、矢野講師からギニオル(人形)の製作ならびに実演の指導をうけるとの予告が掲載された。

②両筑地区(久留米・大牟田市、筑紫・三井・朝倉・浮羽・山門・八女・三潞・三池郡)

この地区でも例会と同時の研究会が開催されていた。第20号によると昭和22年10月には、田主丸保育所の見学の後、人形芝居の研究指導を行った。23年1月には、例会が開催されたかどうかはさだかではないが、17、18日両日久留米の大谷幼稚園で、吉井幼稚園の藤田貞雄を招聘し舞踊講習会を開催している。第24・25号によると23年6月の例会は、吉井幼稚園で開催され、福岡、筑豊等他地区ばかりでなく隣の大分県からも参加、浮羽地方事務所学務課長、吉井小学校長も参加した。第26号に、7月例会では、甘木幼稚園の平井トクの紙芝居、吉井幼稚園の藤田の舞踊の実地指導、進駐軍の幼稚園視察談、井上医師の衛生講話があり、9月例会は、徳随寺保育園で開催し、藤田の運動会遊戯の特別指導との予告があった。また、8月30、31日には浮羽郡吉井町の吉井幼稚園で石井小波の舞踊講習会が開催される、との予告もあった。第32号によれば、24年2月23日に、大牟田市三井鋳業所萬田保育園で開催、炭鋳の実地を見学した。

③福岡地区(福岡市、糸島・早良・粕屋・宗像郡)

第26号によると、昭和23年8月下旬から9月上旬にかけて、福岡市の保育専攻学校で九州保育研究所講師の原田観岱の書道講習会が開催された。第32号には、昭和24年2月5日、宗像郡福間地区では、例会開催時に「福間幼稚園で『卒園記念品』等についての研究を行った」とある。

④筑豊地区(直方・飯塚・田川市、遠賀・田川・鞍手郡)

第15号によれば、昭和22年6月8、9日に、直方市の西徳寺保育所で保育講習会を開催し、受講者は60名であった。第31号には昭和23年12月10～12日に直方市の立正保育園でステージ向きの遊戯の講習会が開催され、講師は九州保育研究所講師藤田貞雄で「盛会であった」こと、第32号には立正保育園で2月28日に例会を開催し、小倉市童話研究会の永田従勝「童話と紙芝居の研究」の「御話」があるという予告が記さ

れていた。

⑤北九州地区（門司・小倉・若松・戸畑・八幡市）

第26号に、北九州各地で、九州保育研究所講師の藤田貞雄の舞踊講習開催との予告記事があった。

このように、「九州保育新聞」には、全国保育連盟と県保育連盟共催の講習会や各地区主催の保育の研究会・講習会に関する記事が数多く紹介されている。これらの記事から、「新保育」を構築するために、連盟が中心となって保育関係者の研修を推進しようとしていたことがわかる。

（寺部直子・桜花学園大学非常勤講師）

5. 保母の養成

(1) 県主催の保母講習会

昭和23年4月10日の第23号には、「児童福祉法施行に伴う保母の再教育」として、3月22～27日に「第一期保育施設保母講習会」が開催されたことが掲載されている。また、第24・25号に7月26～31日に新規受講者対象の「保母再教育講習会 第二次」も二回開催、第27号に昭和23年8月23～27日に「第二回第二期保母資格認定講習会」、第28・29号に、「第三次講習会」の地方会場が直方であったこと、10月16日～22日の「第四次の地方会場」は小倉であること、福岡会場では、第3次を9月27日～10月2日、第4次を10月22日～27日開催するとの記事があり、福岡市とその他の地方で、第1次から第4次までの県主催の保母の再教育・資格認定講習会が行われていた。

(2) 九州保母養成所の開設

第32号には、九州保育研究所が「財団法人設立認可さる」という見出しの記事があり、主たる事業は「児童福祉施設当事者の養成、児童福祉施設の経営、その他児童福祉に関する新聞、雑誌、図書の刊行並びに児童福祉に関する研究調査及びその助成と講演会、講習会、見学会の開催等である」とある。この財団法人の理事長には、設立当初の学監であった岡田栄資が就任した。

同号に、その研究所が「九州保母養成所」を4月に開校するという記事があった。「時局の要請に応え保母養成所の設立を企画 着々準備中であつたが此の程仮校舎も決定したので四月の新学期から開講の予定で当局に認可申請書を分すと共に児童福祉法施行令第二十九条による厚生大臣の指定の申請を併せ手続き中である、本科は二年制、専修科、選科各一年制で聴講生の制度もある、寄宿舎の設備もあり遠隔の者も安心し

て勉学ができることになっている。所長は九州保育連合会会長大野柔忍氏」で、同号の保母養成所生徒募集の広告には「本所は九州保育連合会の指導で実力ある優秀な保母の養成を目的として」開設したとあり、場所は「久留米市瀬ノ下町水天宮内」と書かれている。

さらに、同号の「筑紫路」というコラムには、「幼稚園や〇育所の先生は従来誠に恵まれない境遇であつた、所謂社会事業施設の従事者の待遇は甚だみじめであつた。「だから特別の熱意と興味をもつた者以外にはこの『聖職』は殆んど顧みられなかつた。「従つて優秀な先生を得るに難くこの先生の不足ということが事業の発展を阻害した大きな原因だつた。「然し教育基本法学校教育法、児童福祉法等が相次いで施行せられ、その待遇も次第に改善されることになつた。「この時に当つて各方面の絶大な後援と支持の下に久留米市に〇母の養成所が開設されることは全九州の〇育界の為に誠に祝福にたえない。「〇育事業発展の為、各地から人材を送つて優秀な先生の養成に努力しよう」とあり、優秀な保育者の育成が保育事業の発展の為に不可欠であると考えられていたことがわかる。

第35号の「保母養成所発足」という見出しの記事に、「仮校舎の関係で多少開校がおくれたが此のほど発足」「教室に未だ余裕があるので目下二次募集中」とある。同号の「保母養成所は何う運営されるか」では、今後の運営方針として「二年制であるが実際には運用に考慮を加えて一年はミツチリ学科をあとの一年は施設に於て実習しながら指導をうけさせ」「生徒の負担を軽減すると共に、施設経営者から委託し易いようにしたり又、リズム、製作等実践的科目を主とした短期講習も度々これを行ひ県主催の認定講習と平行して真に役に立つ保母を養成したい」という岡田理事長の談話を掲載している。

（寺部直子）

6. 福岡県保育連盟の発行誌『育てつつ』より

『育てつつ』はB5サイズの10頁ほどのガリ版刷りの小冊子であるが、筆者たちは昭和21年1月号（第二巻第一号）と同年3月号（第二巻第三号）の2冊を入手することができた。

(1) 福岡県保育連盟が希求しようとしたこと

2で述べたように、昭和21年に「福岡県保育連盟」が立ち上げられるが、その母体となったのは「福岡市保育協会」であった。この協会は、その5年前の昭和16年に発足し、戦前からフレーベルの幼児教育思想

に学びながら、幼稚園にも保育所（当時は、託児所）にも、幼児期の子どもたちに格差のない教育を要求していたようである。このことは、「福岡県保育連盟」が発足した直後の昭和22年1月の第二巻第一号巻頭言に「保育事業の進路」と題して、冒頭に「福岡市保育協会設立後五年有余、今日茲に福岡県保育連盟の結成を見たことは、保育道のため慶ぶべきことである」と謳い、「我が保育事業は、如何に進めばいいかと言ふ点に到達するが、それは今一度幼稚園・保育所共に障壁を除き、幼稚園令の精神に還ること」「機構の一元化を要望し、実際の業務に携っている我々は、一元化された事実を作り上げてしまふ事」だと強い語調で記されている。記述者名は「笹舟子」であるが、機関誌の発行責任者の福永津義であると推測できる。

さらに、「幼稚園は純教育事業（？）として特殊の発達をとげ、恰も特権階級子弟の教育機関の如き観を呈するに至」り、「庶民、特に稼働者階級の要求として誕生したのが、託児所であり保育所である」と述べて、「保育所は唯単に幼児を受託すると言ふことだけで、教育の面が忘れられていいのだろうか？」と、我が国の保育事業に納得がいけないという見解を投げかけている。県保育連盟の結成に際し、「国民皆保育、双方の一元化、之を目標として設立せられた福岡市保育協会が、今回福岡県保育連盟といふ大きな組織の下に包含されたことは、ほんとに喜ばしい事」と、保育事業の一元化に強い期待を寄せている。この巻頭言の文末には、「我々保育事業の前途も決して易々たる平坦な道ではない」「しかし、我々だけでもやるといふ覚悟を以て日本の将来のためやり抜くのだ」との覚悟を表明している。

この記事から、福岡県保育連盟は保育事業として幼稚園と保育所の一元化を希求し、保育所にも幼稚園と同様に教育的機能を充実させることを要望していたことがわかる。

(2) 当時の子どもの様子

この小冊子には、両号とも、戦後の厳しい現実社会の中で生きる子どもの様子が記載されている。第二巻第一号には、西日本新聞記者の蒲浦信義が「浮浪児を送りて」というタイトルで、第二巻第三号には、福岡市視学・西武児童文化連盟主事の野辺忠郎が「師子相伝」というタイトルで、戦後の荒廃した社会の中でかろうじて生活している子どもたちの姿が写實的に記され、同時に、戦後の日本教育にける期待と要望等が切々と述べられている。占領期の子どもの生活現実か

ら目をそらすことなく、先述したように幼児たちがどのような境遇にあれ「教育」を平等に受けることを県保育連盟は自己課題とし、戦後の保育事業として新しい道を自らの力で切り拓こうとした心意気が読み取れる。その一部を紹介したい。

① 「浮浪児を送りて」より

100名を超える戦争孤児が収容されていた福岡市の百道松風園という施設では、市社会課職員と婦人警官たちが、連日午前4時から出勤して子どもの行方を確認していたようだが、この日は31名しかいない。この時の様子が、次のように記されている。

「送られても送られても、幼いジブシーはまたもとの古巣駅頭の戦災跡地の地下室に返って来る。彼等にとっては大人が考へて差しのべる『格子なき牢獄』も所詮は鉄条網にはりめぐらされた束縛の天地としか映らないのであらうか」「駅の待合室から連れ出された外の児と一緒に集められたころ、夜もどうやらあけそめた。あかで顔一面に地図ができた児、『どこにつれていくんだ』とどなる児、『飯を喰はせる』と係員にすがりつく児、さながら大人の世界の縮図である。」「素足でボロ洋服」の子どもが「市役所屋上で、警察官相手に商売」する姿などが記されている。同時に、「而しながら、外の通りを眺める眼の奥には、戦災でなくなった父母を思ひ出すのか、口には流行歌を口ずさみながらも 美しい童心の一部がのぞいているようである」との文章もある。

この記事では、戦災孤児の悲しい生活実態とその奥に潜む純真な童心を直視している。

また、同号の最後ページ「浮浪児収容保護」欄には、「福岡県下一斉に行われた長時日の放浪と栄養失調で、近頃のきびしい寒さに抗しきれず、駅頭に、公園に一人二人と死んでいく」とある。これが、占領期におかれた子どもたちの厳しい生活実態の一面である。

② 「師子相伝」より

この記事は「あどけない子供達は今のような世界に遊んでいるのだろうか。悲しい日本の運命を大人と共に正受しつつも親や師と共にあるが故に、やはり無心に天心に遊んでいることであらう」との文章で始まり、教師と親の子どもへの教育に対する責任やそのあり方を述べている。「人間形成に端緒をなす乳幼児期の教育は極めて深刻徹底的な力をもっている」「家庭に協力して（中略）調整して正しい方向と組織の可能な環境を作ってやる必要がある必要であり、又教育の表面

的効果よりも歌を歌ひ、遊戯を覚え手工をすること、その事そうする魂それ自身が重視せらるべきであらう」と書き、「楽しい遊び場、楽しい教室。一もっと明るく、もっと楽しく、もっと子供に相談し、もっと子供を働かし、教へることをやめて育てることに力を入れたい」と述べ、「新しい日本の歴史に明るい希望をもって（中略）一応本源にたちかへて再出発したい」このためには「社会的・公共的に何とか協力出来ないものか」と括っている。

上掲2つの記事から、この当時の子どもの生活実態と、戦後の新教育への決意のようなものが読み取れる。これは、福岡県の保育事業に携わる者の共通した思いを表しているのではないか。

(3) 理事会の議事録より

昭和22年1月下旬に緊急臨時理事会が福岡市春吉の山茶花荘にて開催された。その時の議事録が3月号に掲載されている。

出席者は、「福岡部会 福永会長、副島常務 北九州部会 楡理事 不破理事、西筑部会 岡田副会長 松尾理事、京筑部会 不参 県社会事業協会 田中理事」である。

以下は、討議された重要事項の要点をまとめたものである。

1. 『育てつつ』刊行に関して、資金面で困難なため各団体毎月10部の配布とすること。「現在までは比較的研究誌としての色彩が強かったが、今後は機関紙として」いくこと。

2. 資金募集に関して、会長・副会長の保育講演を主体とすること。

3. 昭和22年度の事業として、夏季講習会（8月上旬に総会を兼）、秋期講習会（各部会ごとに）、『育てつつ』を万難を克服して続刊するなど。

4. 職員待遇に関して、初任給保母（有資格者）350円、助手（無資格者）300円を基準とする。

上記のように、昭和21年12月の総会結成直後の年明けの1月に首脳部が集まって、臨時理事会を開催し、連盟の具体的な方針等を決めていったことがわかった。

（豊田和子・桜花学園大学）

おわりに

本稿では、「九州保育新聞」を手掛かりに、占領期

における福岡県の保育事業団体の組織化、研究大会の開催、各地区主催の研修状況、保母養成機関の設置等について事実を明らかにし、併せて、連盟発行の機関誌の内容分析を行った。その結果、幼稚園に比較して保育所数が圧倒的に多い同県では、戦後の早い時期から保育所関係者も熱心に保育・幼児教育の改革に力を入れていたことが明らかとなった。福岡地区を中心に県内各地も足並みを揃えて保育改革と幼児教育の質の向上をめざして活動を展開していこうとしていた点は、同県の特徴として指摘できる。

（旧字体は、固有名詞以外は新字体に改めた。）

注

- 『福岡県教育要覧（昭和28年版）』福岡県教育庁調査統計課、昭和29年、51～52頁。
- 保育所数は、福岡県保育所連盟の『福岡県の保育事業の概況』（昭和34年、4頁）による。幼稚園数は、『福岡県統計年鑑』の昭和23年から29年による。昭和20年代の『福岡県統計年鑑』は、年になっているものと年度となっているものがあるが、ここでは年で統一してある。昭和27年以降は5月1日現在。ここで掲げた数値に関しては、例えば昭和23年の小倉市の幼稚園数は1となっているが、『小倉市勢要覧昭和23年版』（小倉市庶務課統計係編、小倉市役所、昭和24年）をみると、公立1、私立3となっているというように、違いがある。
- 『福岡県統計年鑑』には、地域別の幼稚園数は昭和23、25、27、28年に、保育所数は昭和23年の次は昭和28年に掲載されている。表中の空欄は0、一は、市がなかったことを表す。
- 『昭和26年度教育要覧資料教育統計』（福岡県教育庁調査統計課編、昭和27年）『福岡県教育要覧（昭和28年版）』に紹介されている数値も合わせて比較した。
- この5地区の地域割は、資料2のようである。はじめて行政地図が掲載された昭和32年の『福岡県統計年鑑』をもとに作成した。
- この記録書は、木屋瀬保育園の鷲峰敦尚が参加してまとめ、ガリ版刷りにしたものである。
- これは20頁程の小冊子で、表紙に「主催 全国保育連合会 主管 九州保育連合会 後援 文部省・厚生省・外」と書かれている。
- この号の表紙には「育て津々」と書かれている。

資料1

紙名	号	日
学業院新聞	1	4月29日
	2	5月15日
	3	6月15日
	4	7月15日
	5	8月15日
	6	9月15日
	7	10月15日
	8	11月15日
	9	12月15日
	10	1月15日
	11・12	3月15日
	13	4月15日
	14	5月15日
	15	6月15日
	16	7月15日
	17	8月1日
	18	8月31日
	19	9月1日
	20	11月1日
	21	12月20日
	22	2月10日
	23	4月10日
	24・25	6月27日
九州保育新聞	26	7月25日
	27	8月25日
	28・29	10月1日
	30	11月15日
	31	1月15日
	32	2月28日
	33	3月20日
	34	3月27日
	35	5月20日
	36	7月20日
37	9月30日	

資料2

